
読書少女と図書館館長

華宮妃水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

読書少女と図書館館長

【Nコード】

N1898Y

【作者名】

華宮妃水

【あらすじ】

読書が大好きな“読書少女”
不思議な館を管理する“館長”
不思議な不思議な2人が出会って
動き出すいろいろな世界

本が好きなあなたも、嫌いなあなたも
ぜひ、読んでください

前置き（前置き）

読書少女と図書館館長を読む前にお読みください

前置き

周りの雰囲気とかけ離れた館
そこにあつた物とは！？

異世界！？力！？本！？鍵！？姫！？

一体ここは何処！？

何の話をしてるかわかんない！！

私が姫！？

そんなはずない！！

読書が大好きな少女多辺朝姫 たなべあさき が迷い込んだ不思議な館

そこで待ち受けている彼女の運命
そして、動き出すさまざまな世界

剣あり、魔法あり、異世界ありのメガネあり！？
そんなファンタジーな小説

これを読んだら図書館に行きたくなること間違いなし！！
(の、ハズ)

皆さんが楽しめるような小説を書いていきたいです

前のサイトURL

<http://dokusyotokantyou.blog.fc2.com/archives.html>

プロローグ

パタンッ

本が閉じられる音

静かな部屋にただずむ一人の少女

彼女の目の前には1冊の分厚い本

その本は軽く人を気絶させれるほどの厚さ

そして周りにはあふれんばかり本が入ってる本棚

「これで…最後」

彼女がいる場所は

東西南北の真ん中に位置する“中央図書館”

他の4つの図書館をはるかに凌駕する圧倒的な本の数

だが、彼女は全てを読み切ってしまった

この図書館に来て3ヶ月

他の図書館はほぼ1ヶ月単位で制覇してしまった

彼女は本を読む

毎日毎日狂ったように

平々凡々な毎日から目を背けるように…

第1話

（今日は何処へいこう・・・この辺りの図書館や本屋は行ったし・・・）
・
そもそも学校帰りじゃい行けるとこなんて・・・）

考えごとをしながら歩く彼女の名前は多渡朝姫^{たなべ あさき}
黒い髪に黒い瞳、普通の身長で公立高校に通う、ごく普通の高校生
ただ、彼女は本を読む

毎日毎日狂った様に

家でも学校でも

何冊、何十冊、何百冊と

本当に狂っているかのように

そして、今日も何処かへ行つて本を読もうかと考えていたのだが
ふと気がつくと全く見覚えの無い場所を歩いていた

（あれ？ここ何処？考えごととしてたら変なところ来ちゃった？）

もちろん、彼女にそんな気は全く無い

そもそも彼女の家と学校までの距離はさほど離れてはいないし、
真っ直ぐ一本道なので絶対に迷うはずはないのだが・・・

彼女は完全に迷った気でいた

（マズイなあ・・・完全に迷子だよ・・・少しぐらい知ってる建物があればなあ

・・・ん？何、あの大きい建物）

辺りを見回すと少し離れた場所に、この辺りの雰囲気とはかけ離れた感じの

建物が建っていた

（図書館・・・かな？

この辺りの地理は知らないけど、こんな建物があるなんて聞いたことないんだけどなあ）

そもそも図書館があるならとっくに行っているはず

（何か、図書館っぽい雰囲気はするんだけどなあ・・・

行ってみようかな？

でも、見当違いの場所だったら・・・）

もしも本当に図書館ではなく、とんでもない所だったら・・・
考えるだけでもおぞましい

（でも、あれはきっと図書館！

ともかく、行ってみよう！）

興味の勝ち

（うわー・・・結構大きいのね・・・）

目の前に立ってみるとかなり大きかった
そのためなかなか入る勇気がわいてこない

だがしかし、ここまで来たからには入らないワケにもいかず・・・

意を決して入ってみることにする

ドアを開けると“ギイ”と嫌な音をたてて開く

「こ、こんにちは」

「ーーーー」

誰も居ない？

そう思い、中を見回すと

「ああ・・・！本だぁー！！」

中には壁一面本棚で埋め尽くされ、

その本棚にはあふれんばかりの本で埋まっていた

目を輝かせて本棚に飛びつく朝姫

早速本を出して読んでみる朝姫

だが、見たことがない文字が羅列していた

「あれ？見たことがないほんばかり・・・

って言うか、文字が読めない・・・？」

何冊も出してページをめくるが、読める文字が出てこない

（外国の本かな？でも、見たことのない文字だしなぁ）

と、一人で考えにふけていた時

ガチャッ

「!?!」

ドアの開く音

人の足音

こちらに近づいてくる

(どうしよう・・・怒られそう・・・)

「おや、珍しいですね

こんなところに、ましてやこんな時間にお客さんとは・・・
どちら様ですか？」

声を掛けてきたのは若い男の声

だが明らかに歓迎はされていない様子だった

「ごっつ、ごめんなさい！わ・・・わた、私・・・」

上手くしゃべれない

それどころか、身動きすらとれない

(どっ、どうしよう・・・体が動かない・・・!?)

や、やっぱり入っちゃいけなかった!?)

朝姫がそんなことを考えてるなんていざ知らず
謎の男は続ける

「まあ、その本を開いた時点で

あなたの“死”は決まっていますが」

そう言いながら男は朝姫に手を向けながら

『喰い殺せ“狂気”』

何かが自分に迫ってくる

だが動けない
声も出せない

自分を殺そうとする何かが
だが、動けない
動くことができない

まるで何かに縛られているかのように

助けを呼べない
逃げることもできない

確実に自分を殺そうとする何かが
すぐそこまで迫ってきている

後ろの方で男が

「あれ・・・君ってこの辺りの・・・!?!」

と何かを言ってるような気がするが聞き取れない

そして

全身に激しい痛みを感じると同時に
朝姫の意識は闇の中へと消えた

第2話

「ん・・・？」

まだダルく、眠い目を開けると

自分には全く見覚えの無い天井が広がっていた

「・・・・・・・・・・？」

自分が今どんな状況でいるのか全く分からなかった

それに、全身のあちこちが痛くその痛みのせいで身動き一つとれない

「あー・・・・・・・・ん？」

だんだん意識が鮮明になってくる

そうなるより体の痛みが増す

（あー・・・・・・・・何か体超痛い
でも何でこんなに体痛いの？）

糸のように細い記憶をたどると、さっき（？）
見に起こったことを思い出す

（そー言えば、何かヤバい感じの場所に来ちゃった？）

結局この謎の建物に入ったことを
今更後悔する朝姫

と、そこで

「あ、起きました？
体の調子はどうですか？」

「最悪・・・」

かろうじてそれだけ言えた
実際声がガラガラしていて一氣に年を取った気分だった

「すみません
てつきりここにある“鍵書”（きいしょ）を盗みに来た人間かと・・・」

禁・・・書？

「禁・・・書って何？」

耳慣れない言葉を聞いて不思議に思う朝姫

「あゝ・・・多分字が違いますね
ま、それより先に『照らせ』」

今だに謎の男はそう言い朝姫に手をかざす

「ああ・・・やっぱり・・・しまったなあ
「ちょ・・・何？」

変なことを言われて焦る朝姫
身動きが取れない上に

上手く喋ることができない

「いや、ちょっとマズイんですが
少し目を閉じていてください
楽にしますから」

（ちょ、ちょっと待ってー！
ら、楽にするって、まさか・・・！？）

「あ、殺すってワケじゃないので安心してください」

（ふー・・・）

“殺さない”と言われて安心する朝姫
そして目を閉じる

優しい光に包まれ、少しずつ体が楽になっていく
すると、段々ねむくなっていく

（あ・・・何か寝ちやいそう）

そんな朝姫を見ながら少しだけ安心する謎の男だった

「さ、終わりましたよ
これで動くことも話すことも可能です」
「ん・・・」

そう言われて起きあがってみる
辺りを見回すと本棚に囲まれた廊下だった
どうやら廊下に寝ていたようで

さすがにまだだるいがさつきよりはかなり楽になっていた

「いやーさつきはすみません

ここにある鍵書を盗みに来た“ディバイバー強奪者”かと思いましたよ」

鍵書？強奪者？

何を言ってるか全くわからない

そもそも格好からしてアヤシイ・・・

四角いブチメガネにボサボサの髪の毛に

ボロボロで何だか汚いロングコート

見るからに怪しそうな男

「あ、自己紹介がまだでしたね僕の名前はグロース」

「あ、私は」

「ああ、大丈夫です

あなたの情報は大体見たので」

と、言って朝姫の通学カバンを指す

プライバシーの侵害だろ！！

なんて言える立場じゃないのでとりあえず黙る

「で、非常に残念なことなのですが

あなたには死んでもらうことにしました」

「えっ？」

——死んでもらうことにしました

——死んでもらうことにしました

——死んでもらうことにしました

言葉が反響する

死んでもらうことにしました

——えっ？

「ちょ、ちよつと待って！何で私が死ななきゃいけないの！？」

反応が悪いというか、鈍いというか・・・

まあ、それはおいといて

「それはですね、あなたが“鍵書を手に取って、目にしてしまった”からです

ここに保管している本は原則“機関”の人間と“外の者”しか見てはいけないんです」

また出てくる意味のわからない単語
機関？外の者？

もしかしたら自分हतんでもないところに
迷い込んでしまったのかもしれない

「って、こんなこと話してる場合じゃないですね今度は力はゆるめ

ませんから」

そう朝姫に言い腕を前に出し
さっきと同じことを言う

『喰い殺せ“狂気”』

朝姫に向かって蛇のようなものが向かう

「！！」

とつさに頭を腕でかばってしゃがむ

時間がスローモーションのようにすごく遅く感じる
どうしてこんなところに来たのか今更後悔する

こんなことなら、学校の図書館にでも行けばよかったと思う

ああ、自分は死ぬんだな・・・

迫りくる光に意識をむけながら朝姫は・・・

「死ん・・・でない!？」

今度こそ本当に死ぬと思っていた朝姫は
驚きのあまり声をあげる

ところが、朝姫以上に驚いていたのは
術を放ったグロース本人である

「術が!？・・・なっ!？」

グロースが立っていたのは朝姫からかなり離れた

・・・殆ど館の入り口に近いところに飛ばされていた
強力な術者ならば攻防両方行えるが
彼女はどう見ても一般人

「まさか・・・」

何かを思い出したかのように顔を上げ朝姫を見る

体全体からほのかに光っている

一瞬にしてグロースは状況を理解する

だが、もしもグロースが思ったことが本当ならば
今すぐに彼女をとめないと

彼女は死んでしまうし、この館ごと消し飛んでしまう！

「くそっ！」

ここには重要な書物や機密文書が納められている

——この館が消し飛ぶのはまずい！！

そう思うのと同時に朝姫の方へ走り出す

何としてもこの館が消し飛ぶのは絶対に防がなくてはならない

だが、朝姫との距離がやっと中間に差し掛かったとき

「———？」

グロースが走っているのに何の反応も見せない朝姫

館が広いため一番奥と入り口では相手など視認できないが走っていれば足音などで気がつくはず

なのに、逃げるところか悲鳴さえあげない

こらなら間にあうと思ったグロースだが

「ああああ・・・」

突然声をあげ頭を抱えて後ろに

のけぞるに立ち上がる朝姫

力が、覚えたことを全て吐き出そうとしている

「くそっ！遅かったか！！」

だがグロースは確信する

あの娘こそ自分達が望んでやまなかった存在だということをだから死なせるわけにはいかない

よりスピードを上げて朝姫の元に走り寄る

朝姫はうつろな目でグロースを見る

手を上げて何かを言おうと口を開く

だが、何かを言わせる前に

グロースは朝姫の手を取って

『閉じる』

と一言、言つと

倒れ込むように朝姫の体から力が抜ける

そんな朝姫の体を支えながらグロースは喜びに浸っていた

今度こそ本当に“鍵”を手に入れたのだから

第3話 1 (前書き)

暴言以外の辛口コメントお願いします
参考したいので…

長いので二つにわけました

第3話 1

「はい……そうです。はい。」

あれは“鍵”に違いありません……はい、そうです。

…この館に入ってくるどころか、本を開いて読んでいました。…はい
多分、記憶したことは忘れているはずです……ええ

……そうです……いえ

……姫？……いえ、そうではありません。

ですが、この娘は……」

「……？」

朝姫が目を覚ますと、少しだけ見覚えのある天井が広がっていた
何か、ベットののような硬いものに横になっているようだった
気持ちいいような、悪いような……

そんな変な気分の中、かすかに話声が聞こえる
どこかで聞いたことがあるような気がするが
記憶が曖昧で思い出せない

誰の声かと首を動かして声のする方を見してみる

声のするところに立っていたのはメガネにぼさぼさの髪に、
ぶかぶかのロングコートを着た男が立っていた
どこかで見た覚えがあるような無いような……

これまた曖昧な記憶で……

そして、視界と意識がだんだんとはっきりしてくる

あれは……

「あ、起きましたか？」

⌈
⋮
?
⌋

「おい？起きてます？」

反応のない朝姫を变に思い朝姫の目の前で手を振ってみるグロース

意識と視界が完全に戻ってくる

目の前には謎の男がおり、

自分はベツトのような物の上にて導き出された答えが

「いやあああああ！！！！！！！！！！」

「え？」

「嫌！痴漢！！変態！！」

何を思ったか、突然持っていた枕でグロースに攻撃をする朝姫

「ち、違いますって！！寝ぼけてるんですか！？？」

痛っ！枕でたたかないで下さいよ！！うわっ！！危なっ……！！止めてくだ……ぶふお！！」

必死に朝姫の攻撃を避けていたグロースだが

飛んできた枕にあっさり負けてしまうグロース

「ほえ？」

硬いものが硬いものにぶつかる何とも悲惨な音……

正しくは、グロースが飛んできた枕が顔にぶつかり、その勢いで床に頭をぶつけた音なのだが……を聞いて目をパチクリさせる朝姫

グロースが起きるまで何もわからない朝姫であつた

「それで!」

「ご…ごめんなさい!! 寝ぼけてたの!!」

かなり怒つた口調で言うグロースに対し
ベツトの上に正座して謝る朝姫

「あなたが枕を投げたことは全く怒ってないので気にしないでいいですよ」

「……………（顔が怒ってるよ…）」

完全に怒ってる顔で話すグロース

全く持つて説得力が怒っていることがばれればなのだが

また何か言つと、余計なことを言われそうなので黙っておく

何か言いたそうだが

「それで本当に話を始めますが

これから言つことは他言無用です。

言ったら…わかりますか？」

と言つて手を少し上げるグロース

わかつています!! わかつております!! と、でも言つように首を縦に振る朝姫

「いいですね。」

えっと、まずは僕のちゃんとした自己紹介から。

僕の名前はグロース・アリア。この館を管理しています。

そして、この館の名前は通称、入扉 ドア と言います。

この館、表向きはつぶれた図書館ですが、

本当はこの世界及び、ほかの世界…つまり異世界の散らばってしまった記録、

消えて行ってしまう記憶、見てはいけない記録や記憶など

危険な書物が収められています。

一気に説明しましたが、大丈夫ですか？」

「…多分」

とは言ったものの、ほとんどが理解できていない

異世界？小説やゲームの話？

散らばった記録に消えてしまう記憶？

全く理解できないけれど、ここで止めてしまつとめんどくさそうなのでやめておく

「それで、ここにある書物は“鍵書” きいしょ と呼ばれていま

す」

「“鍵書”？さっきも言つてたよね？」

確か、鍵書がどうか…

「はい。

鍵書というのは“開く者”と“閉じる者”の両者が
深い関わり合いを持っているんです」

“開く者”とは、閉じる者が“鍵”で閉じた鍵書を開き
本の記録及び、記憶を確認する者

“閉じる者”は失われる記録や記憶、知ってはいけない情報などを

“鍵”で閉じる役目を担っている

「へ〜。」

でも、何で今更そんなこと私に言うの？」

さつき（？）まで殺そうとしていたのに、

今になって異世界だとかスケールがすごい話をしだすグロースに戸惑う朝姫

「それはですね、あなたが“姫”だからです」

「ひい！？」

変な声を出してしまう朝姫

名前に姫がついてるため、多少ながらいじられることはあったものの姫と呼ばれたのは初めてだった

「え？え？どういうこと！？え？」

「落ち着いてください。その話もしますから」

そう言って話し出すグロース

さつき朝姫におきた出来事

あれは、“姫の権能”の力そのものだった

姫とは“開く者”や“閉じる者”とは異なった力を持つ者

既に、姫のことは書物でしか知ることのできない存在になっている
しかも、朝姫は“姫”としての権能だけではなく、“開く者”と“閉じる者”

両者の力を持っている

「私ってそんなにすごいのか？」

「当たり前ですよ。あなたは“姫”の権能だけではなく
“閉じる者”、“開く者”の両者の力を持っているんです」
「ほえ」

「しかも、この館は僕が全部術をかけているので、僕以外術は解けないはずなんです
なのにあなたはあつさりと解いてしまった」

「もしも、話が本当なら自分はすごいんじゃないか
そんなことを思ってしまう朝姫
だが、そんな朝姫の心を読んだかのようにグロースは言う」

「今、自分はすごい…とか思いました？」
「ぎく」

「甘いですよ。あなたはその力のせいで死にかけたんですからね」

第3話 1 (後書き)

まだ3話は続きます

第3話 2

衝撃の言葉だった

さつき、自分は死にかけた？
今こうしてピンピン生きているのに？

「あなたの権能の特徴は記憶力だと思うんです」
「記憶力…」

そう言つて黙り込む朝姫

さすがに一気にしゃべりすぎたかと少し後悔するグロース
いくらなん何でも今自分が言ったことは普通の人間からしたらありえないことだ

この館に入る前までは、ごく普通の生活を送っていたはずだ
意味の分からないことを言われてこちら側に引きずり込まうとしているのだ

「…それで…それでどうするの？」
「あなたには、その力を使ってもらいます」
「どういつ…意味？」
「その説明がまだでしたね」

説明がないと何も始まらない
とでも言うように説明を促す朝姫

「この館に収められている書物はほぼ全て異世界のものなんです。
そして、この書物を収めるためには異世界に行かないといけないん

です。

だから、あなたには一緒に異世界に行って書物を回収してほしいんです」

そんなことを言ったら朝姫は逃げ出してしまうと思っていたグロースだが

「何だか、本の世界に迷い込んできたみたい!!」
「へ？」

思わず声を上げてしまうグロース

「だって、そうじゃない!!
こんな…ファンタジーみたいなこと!! 私も行けるのよね!!」

目を輝かせて尋ねる朝姫

「そうですけど…あなたは注意しなければいけないことがあるんですよ？」

「えっと…“開く者”と“閉じる者”のこと？」

「いいえ、“姫の権能”の方です

あなたの“姫”としての権能は記憶力…と言いましたよね？」

「でも、私…全然本…もとい“鍵書”なんて詳しく読んだ覚えも見ただ内容も覚えてないよ？」

グロースが言ったことに首をかしげる朝姫

「それは、さっきあなたが全部忘れてしまったんですよ」
「でも、それだと意味無くない？」

朝姫の言う通り、覚えたのなら活用できるが忘れてしまえば意味が無い

「いいえ、さつきは頭の中で整理されずに記憶されたからなんですさつき、どれくらいの本を出して中を見ました？」

「えっと…最初に1冊出して前のページを2〜3枚めくつてで、読めなかったから…」

と言って考え込む朝姫

考え込むほど引っぱり出したのか不思議に思うグロース

「大体5〜6冊ぐらい？」

「さすがに死にかけますよ」

即答

「だって…知らなかったんだもん」

ふてくされる朝姫

「ま、今更言つてもしょうがないですね。とりあえず、今日は帰っても大丈夫です」

「そう、じゃあそうするわ」

そう言つて帰る準備をする朝姫にグロースは厳しい表情で

「気をつけてください。

あなたは“力”を持っている。

“開く者”、“閉じる者”、そして“姫”としての権能。

あなたは様々な組織から狙われる。

力を、能力を、言動を、権能を、そして命を狙う。
全てを欲してあなたを狙う。」

思い空気の中グロースは続ける

「我々はあなたを守ります
だから、あなたも我々を信じてください」

朝姫はよくわからなかった

なぜ、力がそんなに欲されるのか

なぜ、グロースは姫だとしてもこんな出会って間もない自分を守る
うとするのか

けれど、朝姫はグロースが言ってることが本当のことだということ
は理解できる
だから朝姫は

「わかった」

と力強く答えた

第3話 2（後書き）

3話を書いてて心折れそうになりました…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1898y/>

読書少女と図書館館長

2011年11月25日20時59分発行